もっと知りたいふるさと

延喜式中村神社と祭典

【創立・沿革】

明治初期村誌に依れば「氏子二四〇戸・創建年不詳。本村往古埴科郡に属し、延喜式(九二七年)中村神社なり。然るに中古千曲川の氾濫村落流亡、本村の東北千曲川の本流となる故に、人民水害を避け居を更級郡の地域に移す。後社名を諏訪大明神と称す、後明治十二年再び埴科郡に復す」とある。

その後中村神社と称し今日に至る。祭神は主神建御名方命、相殿事代主命外七神・御幣八本あり、建物は江戸時代初期であったが、老朽化のため昭和四十年代に拝殿だけ建て替えられた。鳥居は以前四脚鳥居であったが、現在は神明鳥居である。

伝承、古老等の口伝に依れば往古より延喜式内社であり、千曲川の氾濫により神社の位置も変わり、現在分かることは以前は現平和橋付近に存在したと推定されている。橋の下流堤防沿い一〇〇メートル付近の畑地帯の地中から、中村神社と刻まれた古碑が発掘され、その付近は御神木または神楽場等の呼名の伝承もある。また、古記録の中に、「寛永卯年秋水入相成永不能保惜哉悲哉…」と記してあり、察するにその後現在の場所に再建され、今日に至ったと思われる。

また、中村という小さな集落に、神主が宮内家（明治初期廃業）と宮林家の二家があり、両家とも相当に古く、江戸時代前より今日まで代々受け継いでいる。

御神体は現在も箱の中に保管されているが、鍵が紛失し中身の確認ができず、古老に尋ねても不明とのことである。

【祭りの行事】

毎年、元旦祭・春祭・秋祭の行事を行う。平成四年当時の宵祭りを記すと、出発前に会所（以前は個人宅、現在は中公民館）で神楽一舞の後、神主宅へ挨拶に伺い、同宅と高根大明神（祭神天児屋命、御神木は樹齢七～八〇〇年とも云われる槻ノ木）に向かって神楽を奉納する。その後神主先導で中村神社へ向かう。行列は関係する役員一同で、三方七個に供物を載せ、神社へ奉納する。神主による神事を行い、神楽は拝殿・水天宮・伊勢宮・中村神社古碑その他の古碑等、四カ所に奉納する。

この行事の記録は、安政年間のものがあり、神楽殿も江戸時代の物で、作者は不明だが、八幡中原の神楽殿と同じ造作のため、同一人物の作によるものと伝えられている。

中地区（通称中村）は、比較的若い集落と見られがちであるが、歴史的・文化財的遺産といえる宝物が残されており、例記すると中村神社の他、県下最古の庚申塔（寛永十年と延宝二年が一基・建立年不明一基）、樹木では徳応院のいぶき（樹齢推定八〇〇年）宮林神主宅の槻ノ木（樹齢推定七～八〇〇年）また、元禄十三年十月十七日と刻まれた双体像が浮き彫りされている道祖神などである。

永い年月を風雪に耐え、地域の人々を見守って来たこれら財産が、未来永劫保存されることを願っています。

千曲市文化財調査員
坂口　俊雄